



発行日 = 2004 年 6 月 25 日 発行人 = 面出薫 編集 = 田沼彩子・上田夏子  
照明探偵団・事務局 〒 150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼彩子)  
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : tanteidan@lighting.co.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

# 照明探偵団通信

vol.19 Shomei Tanteidan Tsu-shin

## 海外調査レポート 1

「飾らない街」  
～インド・ムンバイ～

## 海外調査レポート 2

「水辺のエンターテイメント」  
～オーストラリア・シドニー～

## 海外展示会レポート 1/ 海外調査レポート 3

「ライトフェア 2004」  
「ラスベガス調査レポート」  
～アメリカ・ラスベガス～

## 海外展示会レポート 2

「フランクフルトメッセ」  
～ドイツ・フランクフルト～

## 照明探偵団倶楽部活動 1

街歩き報告 (5/12 横浜みなとみらい線)

## 照明探偵団倶楽部活動 2

研究会サロン (5/31) 報告

## 面出の探偵ノート

## 照明探偵団日記



ムンバイ・マーケットを高所から望む

# 飾らない街

インド・ムンバイ

2004. 02. 23 - 02. 27

田中謙太郎

「ネジから人工衛星まで造れないものは何もないという国でありながら路上にたむろする物乞いと病人や不具者、それでも彼らが生きていける国、インド。この圧倒的な懐の深さの中で光というものがあるように生活に関わっているのかを調査すべくインド第二の都市【ムンバイ】に向かった。

## ■埃と雑踏の街

成田からエアインディアに乗り込み、デリーを経由し約9時間ほどで目的地ムンバイに到着した。飛行機を降り立つとなんとも言えぬインド的な空気に包まれていることに気づく。今まで

に経験したことのない疲労感の中、荷物を受け取りタクシーでホテルまで直行した。

到着が夜になっていたこともあるが、第二の都市という割には都会的な高層ビルは少なく、街の明かりは少なく感じた。走る車中から通りを眺めていると影の中で路上に寝転がる人が目に付く。その中で平然と路上生活している人がいる。話には聞いていたがやはり実際にこの光景を目にすると少々驚かされる。点在する植栽は大きく背の高いものでその葉陰の間からナトリウムランプを使ったポール灯が轟音とともに猛スピードで走り抜けていくタクシーやトラックの排気ガスを透過して路面や空気をオレンジ色

に染めている。

しばらくそんな光景に目を引かれてしていると視界が開けアラビア海に面したマリンドライブという湾岸線に出た。ここは日本でいうと湘南の134号線といったところである。今回の目的地でもあるこの場所は、ムンバイの目抜き通りで末端では「インド門」(港町ムンバイのシンボル。エレファンタ島行きなど近場に向かう船の発着場となっている)があり観光名所となっている。そのインド門の裏手に今回の宿泊先「タージ・マハルホテル」がある。1903年に造られ、昨年で丁度百年になった歴史のあるホテルでインド人がインド人のために造った最高級ホテルとしてインド門と合わせて観光スポットとなっている。

## ■憩いの場所・マリンドライブ

初日は、マリンドライブを重点的に調査を行った。この通りは官公庁、オフィス街のある地区を結ぶ道で、湾を囲むように弓なりに伸びた海岸通り。夜になり道沿いの街頭が灯ると、まるで首飾りのように見えることから別名「クイーンズ・ネックレス」(女王の首飾り)と言われる。マリンドライブは片側4車線の車道幅員25m、海側歩道幅員約10m程の大きな通りでポール灯も全て12mクラスのもので約30mピッチで配置されている。灯具は1本のポールから2基に分かれているものが主流で交差点などでは4基になっていた。強い日差しが照りつける中、4キロ程歩き、通りを調査しながら夜景を撮影するための高層ビルを探し歩き続けた結果、やっと見つけたのが高さ20階程の回転レストランであった。

昼間は強い日差しが照りつけるのであまり人通りも多くはないが、夕方過ぎになると歩道に幾つもの屋台が出てジョギングをする人や若いカップル、家族づれで賑わっている。夕食を兼ねて回転レストランに入ると今まであまり感じられなかったムンバイの全景が見えてくる。通りを照らしているナトリウムランプのオレンジ色の川の中を小さなタクシーの黄色い屋根が一段と目立って走り回っている。その先のマリンドライブではポール灯の光が漆黒のアラビア海に映りこみ美しい弓なり境界線を創っていた。

## ■生活の光・マーケット

2日目には、人々の生活が色濃く出ている場所を探し市内中央に位置しているマーケットに向かった。数本の通りが微妙な角度で交差しその中を夜とは比べ物にならない多くのタクシーやトラックが物凄い排気ガスを撒き散らしながら走り抜けていく。横断歩道の信号もあまり当てにはならないので左右をしっかりと確認しな



マリンドライブの交差点。従来のナトリウムランプを使ったオレンジ色のあかりと対照的に交差点部分はメタルハイドランプで白く照らされている



ムンバイの象徴である「インド門」。夜にはナトリウムと水銀灯でライトアップされ、夜空に浮かび上がる



ナトリウムランプのあかりが漆黒のアラビア海にマリンドライブの線形を浮かび上がらせる

がら車にひかれられないように歩き進んでいくとイギリスが統治していた頃の面影を残す瀟洒な石造りの建物様式を色濃く残している建物が目に付く。モンスーン時の雨に打たれ、その後の強い日差しと埃にまみれる事の繰り返して、石も所々崩れ、なんともかわいそうな感じであった。窓辺に飾られる花も無く、その代わりに雑巾のような洗濯物が並んでいる。マーケットはそれに輪をかけたような強烈な場所であった。パラッ

ク小屋といった風情の軒が各建物から縦横無尽の伸び舗装のされていない砂煙が上がる中で衣類や生活用品、電化製品に至るまで様々なものが所狭しと、陳列されている。人通りも一段と多くなりツーリストは一切見当たらない。「これは少々場違いのところにきてしまったか？」と感じつつも奥へと分け入った。迷路のように細く続く通りを歩いていると、やはりカメラや三脚を構えた日本人という感じが非常に目立

つらしく徐々に周囲の視線が突き刺さってくる。足早に歩きながらマーケットの全体が撮影するためにマーケット内のホテル（ユースホステル）に駆け込んだ。

ホテルの主人に片言の英語で説得し屋上へ上がらせてもらった。急な狭い階段を上り屋上に出ると晴れた青空が広がる気持ちのよい場所であった。更に屋上の給水タンクに登り先程いたマーケットを眺め下ろすと、砂埃で土色に変化した軒先がまるで砂漠のような景色を創っている。夜になると各商店の白い蛍光灯の明かりが力強く軒先からもれてくるその中でいろいろな人が生活の必要なものを買求めに集まり、全く飾り気がないムンバイの日常の景色があった。 (田中 謙太郎)



マーケットの断面スケッチ。通りの中央、地面レベルで500ルクスを確保している



夜になって涼しくなると、マーケットには多くの人々がごった返し始める

# 水辺のエンターテイメント

オーストラリア・シドニー

2004. 02. 22 - 02. 24

田沼彩子

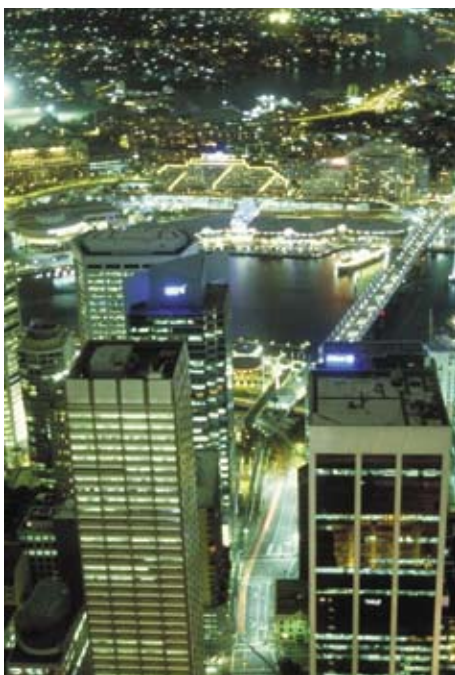


オペラハウスはシドニーの代表的な夜景をつくる

## ■水辺と程よい視点場の関係

世界有数の美しい港を持つ観光都市シドニー。数多くのウォーターフロント再開発の成功は、世界からも注目されてきた。オペラハウス、ハーバーブリッジなどの景観を演出するランドマークが程よくウォーターフロントに配置され、それを眺められるミセスマックオーリーズポイントなど絶好の視点場が用意されている。

夜、シドニータワーから街を見下ろすと高層ビル群を囲むように水辺が迫っているのが良くわかる。観光都市として、エンターテイメントが集結した魅力的な水辺を持つ街。その水辺の力を借りて光を何倍も魅力的に仕上げている。



シドニータワーからダーリングハーバー方面を臨む

## ■水辺のエンターテイメント

ウォーターフロントはエンターテイメント・ライティングの良いお手本だ。とくに水を介して視線が交差するダーリングハーバーでは、都市の中の舞台とそれを眺める客席が心地よい光で包まれ、夜遅くまで人が憩い、集まる場として機能していた。水辺のにぎわいを増幅するのに欠かせないカラーライティングはネオンチューブを多用している。LEDなどが至る所に蔓延っているのでは・・・と想像していたので、あまりの少なさに拍子抜けするぐらいだ。

この水辺の景色に統一感を出しているのが、透明なφ600mmポリカーボネートの真球グローブ製ポール灯。この透明グローブの内部には数種類の光学反射鏡が組み込まれていて、異なる光の演出が選択できるようになっている。もちろん光源は下部に設置された存在を隠すよ



ハーバーブリッジを眺めて憩う

前回のオリンピックが行われた2000年から早4年。オリンピックに向けて急ピッチで進められていた工事も一段落し、シドニーの街はすっかり本来の落ち着きを取り戻している。観光都市としてのお手本を示しつつ、次に目指すものは何だろう？夜の街を歩きながら考えた。

うに考えられている。シンプルな形状の器具に高度な照明制御技術。このあたりは成熟した都市の証とも言える。

## ■マルチファンクションポール灯

水辺から一歩高層ビル群の谷間に入ると、そこは整然とした都市の顔になる。町中の低い位置をモノレールがすごい勢いで駆け抜けている。市民の足と言うよりは観光客用に使われているようだが、これもシドニーを代表する景色のひとつ。

シティ中心部の中でも、オフィス街の中心・マーティンプレイスから南に向けて伸びるメインストリートがジョージ・ストリートとピット・ストリートだ。ここを軸に商業ゾーンが形成されているのがわかる。

ジョージ・ストリートに面したロマネスク様式のショッピングセンター“クイーン・ビクトリア・ビルディング”がこの中心にスペースを占めている。吹き抜けの大空間に、たくさんのショップが並んでいる。ステンドグラスやアイアンレース、モザイクタイルや螺旋階段が随所に配置されていて美しい。

メインストリートの景観を整然と見せるのに一躍刈っているのが、全て同じタイプのアルミの押し出し型バナー付きポール灯。通常の1灯式のもの以外に大きな交差点では灯具が2台取り付けられたものが限なく路面を照らしている。1台に照明、信号、ストリート表示、広告用のバナーを全て持ち合わせたマルチファンクションポール灯だ。幅員18m、車道幅10mに28mピッチで両サイドに向かい合うように設置され、歩道面で100ルクスもの高照度を得られている。こんな高照度は果たして必要？人影もまばらでゴーストタウンようになった夜の街角に三脚を構えながら、ちょっと首をひねってしまった。



シティ中心部のマルチファンクションポール灯

■白い光が押し寄せる

このポール灯の光源が、演色性が良く色温度の高い白いメタルハライドランプなのに対して、ほとんどの建物のライトアップには演色性があまり良くないオレンジ色の高圧ナトリウムランプが用いられている。2000年のシドニーオリンピックに向けた都市のインフラ整備によって、ポール灯はナトリウム系のオレンジ色の光からメタルハライドランプの白い光に取って代わっていったようだ。シドニータワーから街を見下ろすと、縦横無尽に走る白い光がオレンジ色の光の間を縫って押し寄せているかのように見える。

建物のライトアップは建物とは別に取り付けられた庇の上に設置した角型フラッドライトで大雑把にねらったものが主流。照明手法に関して言えばディテールを語るべき緻密さにはなかなか出会うことが無い。



街を駆け抜けるモノレール

■町はずれにて

メインストリートをまっすぐ歩いて町はずれまで行くと、いつの間にかシティ中心部の整然とした景色にも変化が出てくる。照明で言えば、白いメタルハライドランプのファンクションポール灯から木の電柱に取「付けられた配光制御の甘い高圧ナトリウムランプの器具に変わる・・・と言った具合。そしてどこの街にも必ずあるのが中華街。どの国に行ってもそれなりの賑わいを見せているが、ここシドニーの中華街も負けず劣らず。夜遅くまで営業している店が多く、真っ白い蛍光灯や傘無しでメタルハライドランプをそのまま低い軒先にぶら下げただけのような光が幅を利かせている。

コンビニエンスストアはシドニーでも顕在。照明手法は直付けの白色蛍光灯が並んでいるもので、これは日本と同様だった。



水辺に統一感を出しているのがこのポール灯。至る所でみかける

■これからのシドニーが目指すものは？

美しいウォーターフロントが都市を囲むように配置されている・・・という恵まれた立地を持つシドニー。この環境を活かさない手は無い。現状でもオペラハウスからの眺めやダーリングハーバーの商業施設など観光スポットは充実しているが、それと比較して一歩水辺から遠ざかった時に味気ない都市の顔になってしまうのが残念。

シティ中心部の夜の景色も整えて、街のどこにいてももっと水辺のにぎわいや清々しさが感じられる街づくりができれば、観光都市としてワンランク上の街になるのではないかと思った。

(田沼 彩子)



ダーリングハーバーの棧橋もアップライトされていた

# ライトフェアー 2004 ラスベガス調査レポート

アメリカ・ラスベガス 2004.03.28 - 04.01

田沼彩子 + 岡本 賢

## ■ラスベガスコンベンションセンター

今回は面出団長がライトフェアーで講演を行うこともあり、講演の前日にラスベガス入りした我々は、ホテルにチェックインしてランチもそこに講演会場の下見に行く。まず驚いたのがコンベンションセンターの大きさだ。我々の宿泊したヒルトンホテルにコンベンションセンターは併設されており、連絡通路を通して展示会場やレクチャールームに行くのだが、歩けど歩けど長い廊下が続く。それもそのはずこのコンベンションセンターは展示スペース 18 万 5800 平方メートルを含む 29 万 7280 平方メートルという規模の建築なのだ。巨大な展示会場でオープンに向けてブースの準備を行う様はまるで建築現場のようである。

## ■デイライト

今回のライトフェアーの大きなテーマの一つとして「Day Light」が挙げられている。昼光をうまく室内に取り込み省エネルギー化を計るといふものだ。日本でも調光器のメーカーとして知られるルートロンはセンサーで昼光を感知してブラインドと調光を制御するシステムを出展していた。昼光の量にあわせてブラインドの開き具合と、室内の調光をコントロールし最適な照度を確保するというものである。ルートロンの調光システムに関してはもはや説明不要だが、驚くのはブラインドの開閉時にほとんど音がしないことだ。このシステムを導入することによりランニングコストが削減できるという。

## ■LED VS 光ファイバー

会場のどこを見てもまず目に飛び込んでくるのがLEDのブースである。今年の傾向は屋外用の器具が目立つということだ。長寿命で消費電力が少ないなど、良いところばかりが目立っているが、屋外で使用するには光量が足りず台数でカバーすることが多かった。TIR や SPACE CANNON 等のメーカーからは、ライトアップに特化した巨大な器具が出品されており、これまでLEDになかったハイパワーというイメージをアピールしていた。

その他、今やLED照明のリーディングカンパニーともいえるカラーキネティクスからは I-color Tile というパネル上のLEDが展示され話題を呼んでいた。また屋外用の新製品も展示されていたが、他社の製品が大型化する中コンパクトでハイパワーというコンセプトは流石に一歩進んでいる。コンパクトかつ器具の連結性を高めることで同社の最大のウリである細かなオペレーションも可能になるという。

MOODLIGHT や Element Lab といったメーカーからもユニット化されたパネル状のLEDが出品されていた。プログラムと連動させて様々な模様や色の表現が出来る。ここまでくると照明器具というよりは映像装置に近い。

現在建築照明の分野ではLEDによるカラーライティングが多用され一種のブームになっているが、極めて意匠的な使われ方が多く、今後LEDが現行の照明器具にとって変わるためには実用性が課題になるのではないと思う。

勢力を広げつつあるLEDの対抗馬として挙

今年もライトフェアーの季節がやってきた。照明器具の2004年「春の祭典」がラスベガスコンベンションセンターで開催された。ライトフェアーで照明器具の最新情報の収集すると共に、エンターテイメントの街ラスベガスの調査を行った。

げられるのがファイバー照明である。Fiberstars から出品されていたユニット型のアジャスタブルダウンライトは、50wクラスのハロゲンランプと同等の明るさを実現している。また器具裏のチャンネルを回すだけでナロー、ミディアム、ワイドの3種類の配光が選べるという仕組みになっている。ファイバーもLED同様現行の照明にとって変わろうと各社開発が盛んだが、実用性というところではこちらに軍配が上がるのではないかと思う。

## ■蛍光灯

LEDやファイバーに押されがちであり目立たないが蛍光灯にも面白いものがあった。Martin Architectural からは T5 の RGB 三色の光源を一つのユニットとして様々な色を作り出すという器具が出展されていた。また美しいブースで目を引くニッポ電機のシームレスラインは、Award を受賞していた。

## ■各社のプレゼンテーション

さすがはショウビジネスの本場アメリカだけあって各ブースの演出は様々である。タキシードやドレスに身を包んだ技術者や営業マンがいたり、アルコールをサービスするバーのようなブースなど、日本の展示会では見られない遊び心や柔軟さが感じられた。このライトフェアーが単なる展示会ではなく、メーカーにとっては重要な契約の場でもあるので各社のパフォーマンスも過熱する。我々もこういったプレゼンテーションに学ぶところは大きい。



とにかく広いコンベンションセンターの受け付け



屋外ライトアップ用 LED



パネル状の LED 照明